

2016年度博士学位申請論文

教室の談話と再帰的言語—
メタ・コミュニケーションの連鎖が織り成す
「教室で英語を学ぶ」ことの諸層

榎本 剛士

立教大学大学院
異文化コミュニケーション研究科

目次

第1章

序論

- 1.1 本研究の問題設定を生み出すいくつかの前提
 - 1.1.1 「教室」という場所
 - 1.1.2 教育言語人類学の視点から
 - 1.1.3 第二言語習得研究の潮流から
 - 1.1.4 コミュニケーションの実際と言語使用の再帰性
- 1.2 本研究の目的、そして意義
- 1.3 本研究の構成

第2章

記号論的出来事としての「コミュニケーション」と言語使用のコンテキスト指標性：
言語人類学の一般コミュニケーション論

- 2.1 「指標性」のコミュニケーション論序説：ヤコブソンとハイムズ
 - 2.1.1 ヤコブソンの記号論的文法範疇と 6 機能モデル
 - 2.1.2 ハイムズの “communicative competence” と SPEAKING
- 2.2 社会記号論系言語人類学の一般コミュニケーション論
 - 2.2.1 「オリゴ」と指標性
 - 2.2.2 言語の「言及指示的機能」と「社会指標的機能」
 - 2.2.3 「前提的 (presupposing) 指標」と「創出的 (entailing) 指標」
 - 2.2.4 「コンテキスト化」と「テキスト化」
 - 2.2.5 「語用」と「メタ語用」
- 2.3 メタ語用的機能を果たす諸記号
 - 2.3.1 「詩的機能（構造）」
 - 2.3.2 「対照ペア」
 - 2.3.3 「コンテキスト化の合図」
 - 2.3.4 「ダイクシス」「発話動詞」「レジスター」

2.3.5 「フレーム」「ジャンル」「社会文化的知識」

2.3.6 「間ディスコース性」

2.3.7 「スタンス」「フッティング」

2.3.8 「相互行為のテキスト」

2.4 見取図：社会記号論系言語人類学の一般コミュニケーション論

第3章

「教育言語人類学」という視座

3.1 導入

3.2 教育言語人類学の位置づけ

3.3 教育言語人類学の射程

3.3.1 形式・使用のパターンとマクロ・コンテキスト

3.3.2 アイデンティティ、権力、イデオロギー

3.3.3 ミクロ vs. マクロを超えて

3.3.4 社会的アプローチからの第二言語習得研究との接点

3.4 本研究の焦点

第4章

データと分析方法

4.1 埼玉県のある単位制公立高校における「英会話」

4.2 学習指導要領とシラバス

4.3 「英会話」との関わりとデータ

4.4 分析概念再訪

第5章

生徒は「ネイティブ・スピーカー」にいかに出会ったか：教室における「邂逅」の
ポエティクス

5.1 導入

5.2 「お膳立て」としての自己紹介

5.2.1 ルールの導入、あるいは「お膳立てのお膳立て」

- 5.2.2 「自己紹介」を通じた相互行為上の「立ち位置整備」
- 5.3 「インタビュー・タイム」の詩的構造
- 5.4 「偶然を手懐ける」メタ語用的操作
 - 5.4.1 直示的転移
 - 5.4.2 外交的非指標性
 - 5.4.3 同調しないことによる受け流し
 - 5.4.4 換喩的言い換えによる「汚名」の回避
- 5.5 「英会話」の授業における「ネイティブ・スピーカーとの出会い」という相互行為のテキスト
- 5.6 「授業」は自明か？：生徒のメタ・コミュニケーションを掬い取る

第6章

IRE とその分身：生徒のメタ語用的言語使用から迫るもう一つの現実

- 6.1 導入
- 6.2 新任 ALT とのアクティビティ
- 6.3 グループ内コミュニケーションと措定される権力関係・アイデンティティのダイナミズム
 - 6.3.1 ノリがよかった「あの時」
 - 6.3.2 「勇気」があるウチら
 - 6.3.3 「労働中」のウチら
 - 6.3.4 他者の介入と価値づけ・スタンスのさらなる変化
- 6.4 もう一つの IRE、異なるフレーム、(少なくとも) もう一つの現実
 - 6.4.1 “Interviewing Mr. Loper”
 - 6.4.2 IRE とその分身
- 6.5 授業時間中に確かに存在する「授業」以外の現実をいかに照射するか？

第7章

「出来事」と「出来事」が入り組むところ：間ディスコース性、ジャンル、クロノトポス

- 7.1 導入

7.2 「発見的 (heuristic)」枠組み整備

7.2.1 「間ディスコース性」

7.2.2 「ジャンル」

7.2.3 「クロノトpos」

7.3 「授業」のクロノトpos

7.4 「課題・試験と成績」のクロノトpos

7.5 「学校生活」のクロノトpos

7.6 「学び」のクロノトposはどこにあるのか：「パフォーマンス」という補助線

7.7 授業時間中に併存する「クロノトpos」から「スケール」へ

第8章

考察：「特定の『学び』を結果としてもたらす出来事の連続性」を見出すために

8.1 導入

8.2 再提起：教室における「学び」の核としての「パフォーマンス」

8.3 「クロノトpos」、「スケール」、「指標性の階層 (orders of indexicality)」

8.3.1 「クロノトpos」と「スケール」が照らし出すコンテキスト化の側面

8.3.2 スケールの飛び移り (scale-jumping)

8.4 生徒が授業に持ち込む、教室の「外部」

8.4.1 「学校」内のカテゴリー

8.4.2 学校外のカテゴリー

8.4.3 ハビトゥスと社会階層

8.4.4 英語（教育）にまつわる「言説」、あるいは「イデオロギー」

8.5 「メタ・コミュニケーションの『オリゴ』」に投錨された「スケール」の競合が 織り成す「相互行為のテキスト」としての「英語」

第9章

結論と展望：「コミュニケーション論」が切り拓く「英語教育」の可能性

9.1 総括：本研究を前提とした時、「教室で英語を学ぶ」とは？

9.2 本研究の限界と今後の展望

9.3 結語：「コミュニケーション論」が切り拓く「英語教育」の可能性

参考文献

謝辭

要約

本研究は、教室で実際に起こったコミュニケーション出来事を出発点とし、教師や生徒が使用する言語の様々な「再帰性」に着目しながら、教室内で・教室外へ展開するメタ・コミュニケーション、および、その連鎖を辿ることによって、「教室で英語を学ぶ」ことの社会文化的実践としての多層性を明らかにするとともに、そのような研究を遂行する際に参照できる「発見的枠組み」を構築することを目指すものである。

全体への序として位置づけられる第 1 章では、「教室の談話と再帰的言語：メタ・コミュニケーションの連鎖が織り成す『教室で英語を学ぶ』ことの諸層」という問題設定そのものを可能にしている四つの前提を、「教室」という場所の性格、教育言語人類学、第二言語習得研究の流れ、言語使用の再帰性の観点から示し、研究の目的と意義を定めた。

第 2 章「記号論的出来事としての『コミュニケーション』と言語使用のコンテキスト指標性：言語人類学の一般コミュニケーション論」では、本研究が理論的枠組みとして援用する「社会記号論系言語人類学」の一般コミュニケーション論を提示した。この「一般コミュニケーション論」の原初的な形である、ロマン・ヤコブソンとデル・ハイムズによるコミュニケーション論の要点を先ず押さえたうえで、社会記号論系言語人類学の一般コミュニケーション論において鍵となる、「オリゴ」「コンテキスト化」「テキスト化」等の諸概念、加えて、「メタ語用」的機能を果たす諸記号を体系的に論じ、本研究を貫く原理（世界観）を明示した。

第 3 章『「教育言語人類学」という視座』では、言語人類学の枠組み・方法を教育の研究へ援用した「教育言語人類学 (linguistic anthropology of education)」について、その学術的な流れ、何が問題とされてきたか、どのような事象が研究の対象となってきたか、といった点を中心とした記述を行いながら、「教育言語人類学」の潮流の中に本研究を位置づけた。その上で、第 4 章「データと分析方法」では、本研究の基盤となったフィールドワーク先である埼玉県某単位制公立高校、分析対象となっている「英会話」の授業と教師（ALT を含む）・生徒たち、および、データについて記した。

そして、第 5 章から第 8 章で、「メタ・コミュニケーションの連鎖が織り成す『教室で英語を学ぶ』ことの諸層」を段階的に、また、次の章が前の章を批判的に相対化する形で描き出した。第 5 章「生徒は『ネイティブ・スピーカー』にいかに出会ったか：教室における『邂逅』のポエティクス」では、Cathy 先生（仮名；以下、同様）の弟・Ryan が「スペシャルゲスト」として教室を訪れた 1 学期最初の「英会話」の授業を分析した。分析を通じ、この授業における生徒と Ryan の「出会い」が、(1) アイデンティティの対照ペアを駆使したお膳立て、(2) 「IRE 構造」の反復を含む、相互行為の展開と参加の仕方の強固な「詩的構造化」、そして (3) 教師の「メタ語用的操作」を通じた、「教育の場に不適切な内容」の締め出し、以上を特徴とするコミュニケーション出来事の堆積を通じて生み出された「相互行為のテキスト」であったことを明らかにした。同時に、上記のような「相互行為のテキスト」が生み出される傍らで、生徒が互いの「質問」や Ryan の「答え」などにまつわる「メタ・コミュニケーション」を行っていた事実を掬い取ることで、本章で整合的に示すことができた「相互行為のテキスト」とは全く別の「相互行為のテキスト」が生徒の間で生み出されていた可能性を指摘した。

第 6 章「IRE とその分身：生徒のメタ語用的言語使用から迫るもう一つの現実」では、2 学期最初の「英会話」の授業で、新任 ALT・Mr. Loper を交えて行われた、同様の「インタビュー」を含むアクティビティを取り上げた。特定の女子生徒 4 名が「グループ・ワーク」内で質問を考える際に生起した「メタ・コミュニケーション」に特に焦点を当て、「メイン・アクティビティ」における彼女らの「ボーナス・クエスチョン」をめぐる相互行為の展開を、教室全体に共有されている談話と、彼女ら 4 名のみによって共有されている談話の両者を突き合わせながら、分析を展開した。このような分析を通じて、“Have you ever eaten tarako?” という彼女らの「質問」が、「授業に正当な手続きで参加する」、「新任の ALT を試し、教師・他のクラスメートと彼女らとの間の距離感や関係を操作・調整する」という二つの異なる「行為の枠組み（フレーム）」を同時に維持していることが詳らかとなった。そして、これらのことから、(1) 教室においては複数の「行為の意味」が同時に、多層的に生み出されていること、(2) そのような複数の「行為の意味」が多層的にもたらされることそのものが、教室で生徒が使う「英語」の多機能性を指し示していること、(3) この教室には「授業」に還元され得ない、もう一つの「現実」が存在すること、以上を

結論づけた。さらに、授業中の教室に同時に存在する「現実」はこれら二つだけか、という第 5 章と同様の問いを発することにより、さらに異なる「相互行為のテクスト」が併存している可能性を確認した。

第 7 章『『出来事』と『出来事』が入り組むところ：間ディスコース性、ジャンル、クロノトポス』では、第 5 章と第 6 章で明らかになったこと、および、それらの相対化を正面から引き受け、「間ディスコース性」「ジャンル」「クロノトポス」の分析概念を組み合わせた「発見的」枠組みを整備し、教室における「現実」の複数性が「メタ・コミュニケーション」という実践を通じてどのように生み出されている（編成されている）のか、具体的、かつ原理的な考究を行った。「間ディスコース性」を通じて互いに指し示し合う「ジャンル化」された実践を教室の中から特定することで、「詩的な時間が刻む教育的非日常」である「授業」のクロノトポス、「素点が刻み込む『表』の異世界」である「課題・試験と成績」のクロノトポス、『『学校』における諸活動と高校生の中の政治的日常』である「学校生活」のクロノトポス、少なくとも以上の極めて性格を異にする三つのクロノトポスが、授業時間中の教室に併存していることを示した。さらに、このような「クロノトポスの併存」を基礎とし、「パフォーマンス」の補助線を引くことで、『『英語』が媒介する、複数の『ジャンル』・『クロノトポス』の間における『メタ・レベル』を巡る運動』として、「教室で英語を学ぶ」ことのクロノトポスを措定した。しかし、この結論も、「ジャンル」が実際に起きている「出来事」と直截に一対一対応せず、異なるコンテクスト的要素を指し示す他の記号と多層的に絡み合いながら、その場での行為・出来事の意味を立ち上げている、というコミュニケーション論的事実によって相対化され得る。ここから、(1) コミュニケーション出来事の立ち上げに貢献する多様な「コンテクスト化」の過程が「ジャンル化」のプロセスに不可避的に入り込むことで、「ジャンル」とその他のコンテクスト的要素との間に相互作用が生まれること、そして、(2) 学校や教室が「社会」の中に存在する以上、授業時間中の教室で起こるコミュニケーション出来事に関連づけられるコンテクスト的要素を、学校、特に教室の中だけに求めることはできないことを認め、教室から「外」へ向かう契機を導いた。

第 8 章「考察：『特定の「学び」を結果としてもたらす出来事の連続性』を見出すために」では、第 5 章から第 7 章を通じて経験的、原理的、批判的に積み上げてきた視座をさらに引き受け、最終的な考察を展開した。本章では、最近の社会言

語学・言語人類学においてコンテキスト（化）の「複雑性」を描出する際にしばしば援用される、「スケール」の概念を導入し、「教室」および「学校」の外にあるコンテキストを招き入れつつ、コンテキスト化のプロセスの階層性や流動性も視野に入れることで、本研究でここまで示してきた「複数の『現実』が併存する授業時間中の教室」をより広い、かつダイナミックな「コミュニケーション論的全体」の中に置くことを試みた。第 7 章で示した三つのクロノトポスを、教室外、学校外のコンテキスト的要素とともに「スケール」の階層に組み入れながら、最終的に、『メタ・コミュニケーションの「オリゴ」』に投錨された『スケール』の競合が織り成す『相互行為のテキスト』としての『英語』という結論を導出し、このことによって、他の「教室で英語を学ぶ」実践を分析する際にも使用可能な「発見的枠組み」を提示した。

終章となる第 9 章「結論と展望：『コミュニケーション論』が切り拓く『英語教育』の可能性」では、本研究で行った記述全体を基盤として、「教室で英語を学ぶ」ことをどのように見立てることができるか、より一般的な「英語教育」の文脈に引きつけながら、総括的な結論を提示した。本研究の限界と今後の展望を踏まえつつ、本研究で明らかにできたことに基づいて、敢えて一般向けの言説を形成することで、本研究が「日本の英語教育」というやや「スケール」の大きな語りの資源にもなるようにすることを目指した。特に、今日の日本の英語教育において「コミュニケーション」という言葉が氾濫しているように見えることを踏まえ、「コミュニケーション」に関する原理的な説明を加えることができ、「授業」を分析する際に援用することもでき、かつ、「教える内容」を構想する際に参照することもできるような枠組みとしての「コミュニケーション論」の重要性を示唆した。